

協力校の取組

上越市立春日新田小学校

1 研修主題

相手意識をもち、認め合い進んで学び合う子ども

2 主題設定の意図

近年の春日新田小学校は、これまでは、継続的に取り組んできた学年・学級づくりの成果がQ-U等の数値に現れている。しかし、子どもをどう主体的な学び手に育てていくかという課題は、依然として残っている。

また、職員から見た子どもの現状をまとめると、「自分と相性の悪い相手や物事に対して、必要以上に不適切に振る舞ってしまう」ことが課題であると考えられる。この課題を解決するためには、「相手に関心をもって、相手や集団に対して主体的に望ましい行動をする子に育てる」ことが重要である。そこで、研究主題を「相手意識をもち、認め合い進んで学び合う子ども」とし、1年間取り組むこととした。

3 研修の内容と方法

(1) 計画

- ① 目指す学級の姿、1年間の学級づくりの柱、手立てを明確にした学級経営案の作成
- ② 学習指導改善調査の分析とそれをもとにした授業改善

(2) 実践

- ① 学習や日常の生活場面、特別活動に主体的に参加する工夫
 - ・ 全員が主体的に参加できる工夫を継続的に行う。
- ② 定常的な振り返り活動の継続
 - ・ 継続的に振り返り活動を取り入れる。
 - ・ 振り返りの視点や方法などを学年間で交流し、互いのよさを生かす。
- ③ 授業公開
 - ・ 教科は限定せず、各教科、領域の中から選び、実践する。
 - ・ 授業後の協議会は、各学年部で行う。
(他学年の授業参観・協議会にも積極的に参加する。)
 - ・ 低・中・高学年部から1実践を共同参観授業とし、全体研修で協議会を行う。

3 評価方法

(1) 数値による評価

- ① Q-Uアンケートの実施(6月・11月)
 - ・ 6月と11月のQ-Uの承認得点及び、質問項目ごとの変化で達成度を評価する。
 - ・ 自身の指導傾向を振り返る材料として活用する。
- ② 児童アンケートの実施(1学期末・2学期末、月末アンケート)
 - ・ 子どもと共に、学級の課題を客観的にとらえる際の材料として活用する。
- ③ 職員アンケートの実施(1学期末・2学期末)
 - ・ 研究の進捗状況及び自身の学級づくりに対する評価。

(2) 協議会の実施と成果と課題の共有

- ・全体研修での協議会（共同参観授業）
- ・「授業実践レポート」の作成と「研修のまとめ」の発行

4 授業実践

(1) 第1学年算数科「10より大きい数」

① 成果

a 授業づくりの視点について

ブロック操作

「10のまとまり」の量感をつかみ、「10のまとまり」を作るよさを実感できるようにすることが重要だと考え、ブロック操作を繰り返し行いながら学習を進めた。実際、「13」という数をブロックで並べたとき、「 $3 \cdot 3 \cdot 3 \cdot 4$ 」「6と7」「10と3」など、様々な方法が出てきた。どのように並べるかを分かりやすく説明するのがまだ難しい1年生にとって、ひと目で友達の方法と比べられるブロックは、自分と友達の考えを比較しながらより深く考えるための大切な支援となった。



ペアトーク

自分の考えを言語化しながら整理することをねらい、ペアトークを取り入れ、全員が自分の考えを友達に説明する場を設定した。今回、「①まず…12の並べ方 ②つぎに…3の置き方 ③答えは…答えの数の並べ方」と、説明の手順を示したことにより、並べたブロックのことをどのように説明したらよいかを児童にとらえやすくなった。説明の手順はそのまま、よりよい答えを導くための道すじとなるため、有効な手立てであった。



b 研究主題「相手意識をもち、認め合い進んで学び合う子ども」の視点について

ペアトーク

ペアトークを取り入れることは、自分の考えを言語化しながら整理できるだけでなく、児童一人一人が主体的に相手や課題とかかわる機会を保障するためにも有効であると考えた。ブロック操作とペアトークを行うことで、「①並べ方を考えること ②説明の仕方を考えること ③隣の友達に説明すること」を必ず全員が行う。全員の前で発言しない児童も、ここでは主体的に活動し、相手や課題とかかわる機会を得ることができた。

振り返り

みんなで学ぶよさを感じることをねらいとして、授業の週末での「算数のきり賞」を設定した。グループで協力して操作活動を行ったり、ペアトークで自分の考えを説明したりする活動を振り返り、「〇〇さんが、分かりやすいやり方を教えてくれた。」と友達のよさに気付くことができる児童が増えた。休み時間のかかわりだけでなく、教科的な側面からも友達のよさを見付けられる児童をこれからも増やしていきたい。

② 課題

a 授業づくりの視点について

課題設定

今回、授業の導入部分で ICT を活用した。課題提示までをテンポよく行うことや、児童の意欲付けという観点からは、非常に有効であったが、そこでの課題提示が児童に捉えにくかった。ブロックを並べるのは、「答えを分かりやすくするため」なのか、「美しく整頓して並べるため」なのか、「教師のさせたいこと」と「子どもたちの課題」にズレが生じてしまった。

b 研究主題「相手意識をもち、認め合い進んで学び合う子ども」の視点について

ペアトークの内容（目的）の焦点化

説明の手順を示したことは、児童への支援となったが、①～③までの手順を一度に行わせたことで、課題が難しくなってしまった児童がいた。ペアトークの内容が充実するかどうかで、単元や本時のねらいの達成度が変わる。ペアトークでさせたい一番の内容を明確にし、また、初めから終わりまでを児童に任せるのではなく、全員一緒に行う活動を織り交ぜながら、丁寧に進めることが必要であった。

(2) 第4学年算数科「いろいろな四角形」

① 成果

a 授業づくりの視点について

児童が学びを創り出すための展開の工夫

ドット図でいろいろな四角形を作り、これまで学習した図形の構成要素に着目したり、辺の長さや角の大きさを測ったりして、児童の視点で仲間分けをすることができた。その後、平行や垂直という直線関係を学び、その視点で自分たちの仲間分けを見直すことで、平行四辺形や台形、ひし形という四角形の定義を児童の言葉でつくり上げることができた。また、自分たちが創り出していくことで、学習意欲の高まりも感じられた。

身の回りと知識をつなげる学習の工夫

平行や垂直、平行四辺形や台形、ひし形などの知識を身の回りから見つけ出すことで、それらの定義への理解を深め、活用できる知識へとすることができた。また、教室や廊下などの空間で考えることによって、接していない場合でも垂直関係があること、平行な直線はどこまでも交わらないことなどに気付くこともできた。

b 研究主題「相手意識をもち、認め合い進んで学び合う子ども」の視点について

一人一人が話す量（時間）の確保

ペアトークを学習の中に位置付けることで、児童同士が自然に自分の考えを説明したり、相談し合ったりする姿が多く見られるようになった。互いに説明し合うことで、自分の考えを整理したり、友だちの考えから新しいことを気付いたりすることができた。また、困ったときには、ペアやグループでの話し合いができることによって、安心して学習に参加できる雰囲気もあった。

気付きの吹き出しと算数日記での振り返り

学習問題に対する気付きやつぶやきを吹き出しにして板書することで、学級全体で課題を見つけ



たり、課題解決の見通しをもったりすることができた。

算数日記では、1時間の学びをふり返ることで知識の確認をするとともに、児童の思考の流れを教師側が把握することもできた。

② 課題

a 授業づくりの視点について

児童の実態に合わない複雑な学習問題を設定してしまい、課題追求まで至らなかった。ヒントカードを用意しておくこと、課題が明確になるまで学級全体で考えることなど、展開を工夫することが必要だった。また、児童に合った学習問題を設定することの大切さを改めて感じた。



b 研究主題「相手意識をもち、認め合い進んで学び合う子ども」の視点について

ペアトークでは、自分の考えを説明するだけで終わっているペアも多く、伝え合いから話し合いに変換するためのスキルアップが足りなかった。どのようなスキルが必要になっていくかを考えていく。

(3) 第5学年算数科「分数のたし算とひき算」

① 成果

a 授業づくりの視点について

課題解決に向けた個の時間の確保

本時は異分母分数の足し算の導入部分であり、既習事項を生かしながら、まず児童が自分なりの考えをもつことを大切にしたい。あえて導入を2時間扱いとしたことで、前時に課題にじっくりと向き合う時間を確保できた。中には誤答の児童や答えまでたどり着かない児童もいたが、いくつかの考えが出たことで、本時の話し合いに深まりが出たと考える。

教材提示の工夫

リットルまずで分数を表した教材を提示し、 $\frac{1}{3}$ と $\frac{1}{2}$ はそのまま足すことができないことを説明した。リットルまずの中身を実際に移動させたことで、中途半端な分量になり、計算をするには共通の目盛りが必要だということの理解につながった。

b 研究主題「相手意識をもち、認め合い進んで学び合う子ども」の視点について

学ぼうとする雰囲気づくり

学習にやる気をもてない児童もいるが、『分からない』ことを『分からない』と言える雰囲気」を大切に、「みんなで分かるようになろう」という前向きな学級を目指して取り組んできた。一人の児童の意見に対して逐一「似ている意見だ」「よく分からない」などを全体に問いかけ、児童が学習課題に対して当事者意識をもてるよう働きかけてきた。これにより、発表する児童も「伝えたい」という相手意識をもって発表できるようになってきた。

② 課題

a 授業づくりの視点について

図を生かした説明に慣れる

算数の学習においては図を用いて自分の考えを説明することを大切にしてきたが、本時では図を使って説明できた児童は少なかった。日頃からの積み重ねが必要だと実感した。

分数の基本を押さえる

児童の誤答から、分数の基本をきちんと押さえる必要があると感じた。分母、分子の数字は自由に変えられるという誤った考えをもっている児童がいたので、同値分数を作る活動を十分に行う必要性を感じた。

b 研究主題「相手意識をもち、認め合い進んで学び合う子ども」の視点について ペアトークの焦点化

ペアトークの意義、どのように進めたらよいかについての指導が不十分であった。ペアになると黙ってしまったり、教師がねらいとしている活動にならなったりする児童がいた。算数に限らず、ペアトークのよさや目的などを伝え、今後の学習に効果的に取り入れていきたい。

ホワイトボードの活用

本時では、自分の意見を表すためにホワイトボードを用いたが、考えを深める場面で一部の児童のホワイトボードしか活かせず、多くの児童は意見を書いただけになってしまった。授業の途中でお互いの書いた物を見合うなどの時間を設けた方がよかった。

5 研修のまとめ

(1) 成果

全校のQ-Uアンケートを集計して6月と11月の数値の平均で比較したところ、全ての項目で11月の数値が6月の数値を上回った。また、学級満足度尺度をプロットした時の学級生活満足群の割合は、全校平均で72%であった。平成25年度から3年連続で70%台を維持している。さらに、学校生活意欲尺度は、ここ5年間でもっとも高い割合を示しており、学級の雰囲気の高まりが確かめられた。

一方、授業実践の成果からは、相手意識を育みながら主体的に学習していく子どもを育てるためには、交流型の学習を推進していくことがよいという分析結果が得られた。そして、これを推進するために有効なものとして、話し方の指導や視覚的支援等の具体的手立ても、各学年の授業実践レポートで複数報告された。

(2) 課題と考察

春日新田小学校の学級状態は、全体的に、昨年度に引き続いて概ね良好な状態を維持している。だが、依然として学級差は大きく、職員の研究に対する理解と実践の差が課題である。

また、分析から、Q-Uアンケートの数値が高く安定している学級は、6月の時点で既に安定傾向にあることが明らかとなった。このことから、6月までの学級内のルールづくりが重要だということができる。

一方、授業実践からは、次のような課題が出された。

- ・課題が分からない、取り組めない子をどのように支援していくのか。
- ・学習を交流型にしようとする、逆に傷つけ合ったり、学びの差がさらに広がったりする場合があります、学級の状態に大きく左右される。
- ・課題提示をどうするか。学習と関わりの質のバランスをどうとるか。
- ・本時の構想や授業の見通し、時間の管理を通して、子どもの活動時間をどう確保していくか。
- ・ペアやグループで活動できる力をどう育てるか。

ここで、2つの方向性を提案したい。

1つは、1学期間の学級集団づくりのゼロ段階達成と連携して、交流型の学習が展開できることを見通した学級のルールを設定し、定着・内在化・習慣化させていくことである。そして、2学期以降に交流型の学習を展開できるようにしていく。いきなり交流

型での授業をするのではなく、計画的にルールの定着状況を見ながら導入していきたい。

もう1つは、課題設定や既習事項の習得状況を踏まえた学習の在り方について、さらなる工夫を検討することである。特に、データを多くもっている学力向上部と連携し、検討・提案していきたい。